

はじめに



業中である。当方はこの事業に構成立ち上げ当初より事務
下伊那郡阿智村にて今年四月下旬の開館に向けて鋭意建
築する「満蒙開拓和平記念館」(以下、「当記念館」と略す)が、
回に渡って自費調査等しているも、私自身は戦後の国内生
活親や開拓団係者等よりの聞き取りをベースとしている
まれて滿州育ちでもなく、開拓当時の実情等については
いた。また、旧滿州開拓地等にはつい一〇余りで約二〇〇
種類にて、かつ心情的な記述が多くなることを容赦願い
稿も学術的見地等から見れば学究的根拠等も明確で誠に
満蒙開拓に关心を持ってきたに過ぎない。したがって本稿
り当方の両親が元滿蒙開拓団員であつたことから旧滿州や
業は不動産鑑定士であり、全くの門外漢ながら、後述の通
者でも無く満蒙開拓等に関する学術研究者等でもない。本
かせて頂く。但し、予めご容赦願いたいのは、当方は史學
の主テマとなる満蒙開拓に関する当方個人の思い等を書
は、その立場から、当記念館の建築実現までの経緯と、そ
局長(現専務理事)として聞わせて頂いていた。本稿で

—「満蒙開拓和平記念館」の建設実現まで—

語り継ぐ「満蒙開拓」の史実

論文

満洲小小特集

論文

満洲移民の歴史史論
—長野県飯田下伊那地域を事例に—

語り継ぐ「満蒙開拓」の史実
—「満蒙開拓和平記念館」の建設実現まで—

史料紹介

大林作三『終戦の記』 青木 隆幸...48
—満洲大日向開拓団の崩壊—

論文

碓氷峠道の変遷(下) 江川 良武...67
—尾根道からトラバース道へ—

史料紹介

木曾・旧宮越宿と原野村の中山道彩色
絵図にみるいくつかを—

定期総会・研究会開催のお知らせ (表紙II)

会務報告 (35)/会誌「信濃」投稿規程 (表紙II) /
雑誌関係要目

が昭和七年の第一次弥栄村武装移民開拓団を皮切りとして、
やがて、水曲柳での現地の人々との交流は比較的穏
やくあります。幸い水曲柳の属する吉林省には朝鮮族が多くた
うである。幸い水曲柳の属する吉林省には朝鮮族が多くたこと
が原校長等の面接を受けに合格し、昭和一六年四月渡
那農業高校(初代校長・さき原彦十校長の自宅で行われ
進んで手を挙げている。面接試験は下伊那農学校(現下伊
氏宅)にて宿生活した程であったから、開拓団員募集に自ら
醉し、渡港後の一ヶ月には半年近く吉林市松島親造
拓団送出が続くことになった。父はじめの松島親造氏に心
に統じて分村、分郷形式等にていた地域から満州への開
拓団送出が続くことになった。父はじめの松島親造氏が
支持し、早い時期から自由開拓団として送出し、またこれ
であった松島親造氏が、帰国度に講演会等で満蒙開拓の
地の中国人の農地や家を半強制的に買い上げ等して、これを
追い出し、「行ってみたら、そこは家も煙もあつあつした
地の中国人の農地や家を半強制的に買い上げ等して、これを
した開拓団も少なくあります。たまたま、開拓団の多くは現
定できない。一部には辺境地に入り、実際に原野等を開墾
者として現地の人々の田畠や家を奪ったという事実は否
後述するが、この「満蒙開拓」はその多くが実質的には
本來の「開拓」とは言ひ難く、結局は日本による侵略の加
担者として現地の人々の田畠や家を奪ったという事実には
論者が多かったことが上げられる。この飯伊地方からの送
出団としては最も入数規模が大きい水曲柳開拓団を始め、
農山村は全國に数ある中で、長野県から満蒙開拓団が
最も多く、またその中でも飯伊が最も多かつた背景の大き
な理由の一つとして、地域の指導者團の中に満蒙開拓団推進
松島親造氏の講演を聞いたことがあります。貧しい地方
終戦直前の昭和一〇年まで海を渡り満州へ渡っていった

二 現地での開拓団の生活等

のである。

松島親造氏の講演を聞いたことがあります。貧しい地方
終戦直前の昭和一〇年まで海を渡り満州へ渡っていった
が瀬川行きを決意したのは、松島自由開拓団の生みの親、
立金すら払えないまま貧困状態であつたと言つ。その父
の家も祖父が村議会の副議長を務める比較的裕福な農家で
あった。当時、長野県を含む農村部の主力産業であった
養蚕業は生糸価格の暴落や冷害・霜害等で貧困に陥り、父
八兄弟も現在の下伊那郡高森町山岐(旧山岐村)の農家の
方の父も現在の下伊那郡高森町山岐(旧山岐村)の農家の
大きな魅力であった。私事ながら満蒙開拓団員であった当
地主になれる」という説教をして兄と共に譲り受けた農地も無
い中での説教文句で次と共に譲り受けた農地も無
八兄弟の三男坊として生まれ、分けてもらえた農地も無
かった。当時の国内農村の多くは貧しく、子沢山の中で
や現地の反日勢力等に対する「人の盾」を配置するために
連なる「人減らし」、一つは貧困状態に至った農村等から
込まれたのは、ついに満州の権益を争う北のソ連
満州国並びに満蒙開拓の概要、その背景等について詳
しく述べます。正しく叙述してあるので詳しく述べます
満州国に日本人が支配層として君臨する半植民地的国家で
て「五族共和」(日、滿、漢、朝鮮、蒙古)を謳ひながら、
に閑東軍が実質的に支配する傀儡国家であり、国是として
をも鑑み一応は独立國の体裁を保つも、実際には日本(特
に由じた地域と言われる所以である。満州国は國際世論等

が昭和七年の第一次弥栄村武装移民開拓団を皮切りとして、
やがて、水曲柳での現地の人々との交流は比較的穏
やくあります。幸い水曲柳の属する吉林省には朝鮮族が多くたこと
が原校長等の面接を受けに合格し、昭和一六年四月渡
那農業高校(初代校長・さき原彦十校長の自宅で行われ
進んで手を挙げている。面接試験は下伊那農学校(現下伊
氏宅)にて宿生活した程であったから、開拓団員募集に自ら
醉し、渡港後の一ヶ月には半年近く吉林市松島親造
拓団送出が続くことになった。父はじめの松島親造氏に心
に統じて分村、分郷形式等にていた地域から満州への開
拓団送出が続くことになった。父はじめの松島親造氏が
支持し、早い時期から自由開拓団として送出し、またこれ
であった松島親造氏が、帰国度に講演会等で満蒙開拓の
町下市田)の出身であり満州国吉林省總領事館の朝鮮課
送り出した松島自由開拓団は、旧下伊那郡市田村(現高森
開拓団送出の比較的大きい水曲柳開拓団を始め、
農山村は全國に数ある中で、長野県から満蒙開拓団が
最も多く、またその中でも飯伊が最も多かつた背景の大き
な理由の一つとして、地域の指導者團の中に満蒙開拓団推進
松島親造氏の講演を聞いたことがあります。貧しい地方
終戦直前の昭和一〇年まで海を渡り満州へ渡っていった

四分の二を、飯伊地方が全国で最も多くの開拓団を送
以下、「飯伊地区」と置く)の約八四〇〇人と県内送出の約
送出していている中で、最も多かったのが飯田・下伊那地方
を送り出した我が長野県であった。また、県下全市町村から
かからも多くの満蒙開拓団員が旧満州に送り込まれていて
は余り知られていないが、日本に統治されていた朝鮮半島
都道府県から約一七万人の満蒙開拓団が送り込まれ、更に
当時は執政に据えて満州国を建国。ついに全国各地、全
年(一九三二)、満国の最後の皇帝・愛新覺羅溥儀を皇帝
及び河北省の一部を含む)の権益を手に入れ、ついに昭和七
日露戦勝利等を経て満州(現在の東北三省に内蒙自治区
降、歐米列強に負けじと海外展開を図る日本は幸うじての
心として当時の状況等につき若干触れさせて頂く。明治以
て頂へいくこととする。では、当方の画親の体験等を中心
しの方多く、正しく叙述してあるので詳しく述べます
満州国並びに満蒙開拓の概要、その背景等については詳
しく述べます。正しく叙述してあるので詳しく述べます
満蒙開拓団送出とその背景

そのため、本拙稿中の満蒙開拓当時の内容等が画親の体験談や
その属していった開拓団の状況等の様子を主としているといふ
もの容赦願いたい。

後、引揚軍人約三五〇万人、在外邦人約三三〇万人の帰国です。再び故郷を離れ都会や県外に出たり、これまで手つかずであったような奥深い山中へと開墾に入っていた。戦受け入れ等のために緊急開拓事業を全国で実施、長野県内でも約一〇〇余の開拓組合により新規開拓が行われ、これらの地にも満州から引揚者が多く入植した。しかし、劣悪な環境等が多かったため離農率も高く、また元々平坦耕地の少ぶい飯伊地区では故郷の再入植地が得られず、大部分まで開墾に入っている。その中でも、岩手県岩手山麓の滝沢村（今は現飯田市の田上郷村からの分村的位罫として入植し、現地には今も上郷といふ地名がある）や、富士山麓の旧上九一色村の富士ヶ嶺開拓地等には多くの元満蒙開拓団員がこの飯伊からも移住して行っている。かつては戦後、滿州から引き揚げていたあるの富士山麓の場所は現在、満州から引き揚げて後、この飯伊から移つて、再び故郷を離れた人々はなかった。生きる場所を求める彼らの入たちであつた。再び私事にて恐縮ながら、父よりお父さんに対する運動の先頭に立つていていたのも元満蒙開拓団員の母は、しばしば「足先で帰国し父の実家に身を寄せていた母は、しばしば

後に方方に退き、前線には一部の国境守備隊等を除けば日本軍はあつらなかつた。これは終戦の年の春先から関東軍効率的に開拓させた朝鮮半島寄りの南方面まで引き下がり開拓団の大半が住む満州の約四分の一は「放棄地域」として開拓団に知らせず、それどころか敵の追撃を防ぐために鉄道や鉄橋まで爆破してついた。守るべき軍隊も無く、逃げる入りき鉄道も破壊され、女、子供、老人ばかりが生き残る逃亡行は悲惨そのものであり、「生きて虜囚の開拓団に受けす」との戦前教育の下、集団自決を選ぶ開拓団も少なへなかつた。また、豈は山に隠れ、夜に逃避行を繰り返す中で、子供が泣くと敵に見つかるから殺せと言われ、やむなく手に持つて入る者もいた。それで、ついに「死なせたりされたりする等の中、いわゆる残留孤児・婦人が生まれ、その苦難は戦後も長く続へといろとなつた。父が徵兵されたりされたりして捨ねられたり、死なせたりするよりは中國人に預けられたりする等の中、いわゆる残留孤児・婦人が生まれ、ついに開拓団に残つて、いた母はソ連軍侵攻と共に他の開拓団員もまた共に水曲柳を逃げ出し、ついでか斯春の避難民収容所をまことに逃げ出しつゝある。父が徵兵されたりする等の中、いわゆる残留孤児・婦人が生まれ、ついに開拓団に残つて、いた母はソ連軍侵攻と共に他の開拓団員もまた共に水曲柳を逃げ出し、ついでか斯春の避難民収容所をまことに逃げ出しつゝある。

辿り着き、ついで終戦の冬の嚴しい越冬生活を過す。水曲柳開拓団は結束が固く、個々の所持金等を全て集めて共同管理、共同生活を実践したこと言つ。しかし、劣悪な生活環境と酷寒の中で多くの犠牲者を出し、当方の長兄もついで流行病により僅か一歳の幼命を落としている。軍閥として流行病にて現地で越冬せざる係員や開拓団以外の民間人等の多くは移戻と共に帰國を果して、いのちを失った者数より遙かに多い。母たちが日本に渡り、G日本のマッカーサー総司令官に直接にこれを訴えられた丸山邦雄氏(飯田市出身)ら三人の在満邦人教諭団の活躍があったことは余り知られていないが、その様子はアメリカ在住の息子・ホーリー邦昭丸山氏の近著「滿州」から明らかだ。元々分けて暮らす農地も無く満州へと渡った出来た開拓団員らも、難後道の道のりは決して楽なものではなかつた。元々分けて暮らす農地も無く満州へと渡つたといつた者が大半だけだ、懷かしき故郷に帰つたといつていいのである。

四 战後の勞苦の中から

奇跡の脱出「等に取り明かされたりといふのである。

アメリカ在住の子息・ホール邦昭丸山氏の近著「講州・

活躍があったことは余り知られていないが、その様子は丸山邦雄氏(飯山市出身)ら三人の在瀬邦人教説団のええた丸山邦人(飯山市出身)ら三人の在瀬邦人教説団の本に渡り、GJ日本のマッカーサー総司令官に直接して訴えた。この在瀬邦人たちは帰国実現の影には、命を賭して日本に渡り、この日本の士官隊めたのは翌一七年七月のことである。母たちがの方がソ連攻撃時犠牲者数よりも遙かに多い。母たちがを離す、この越冬隊に米養生飴や流行病等に対する心配を果してゐる中で、開拓団はとにかく現地で越冬せざる係者や開拓団以外の民間人等の多くは終戦と同時に帰国をしていられる。軍團で流行病により僅か一歳の幼い命を落としている。軍團水曲柳開拓団は結果が固く、個々の所持金等を全て集めて共同管理、共同生活を実践したと言つ。しかし、劣悪な生活環境と離異の中で多くの犠牲者を出し、当方の長兄も「根こそぎ運動員」により壮青年男性的姿が消え、残された妻は女性、子供、老人ばかりであった。とにかく軍團ではソ連がソシ満國境を越えて侵攻。この時、開拓団では昭和二〇年八月九日、突如として、不可侵条約を結んで辿り着き、ついで終戦の冬の厳しい越冬生活を過します。

三 誰が逃避行と戦後の労苦

日本軍(關東軍)はと言へば、戦略上の理由からといち早くの悲惨な逃避行が始まる。で、この時、開拓団を守るへまきては暴徒化した一部の現地中國人たちが襲いかかり、あるいは女性、子供、老人ばかりであつた。とにかく軍團、「根こそぎ運動員」により壮青年男性的姿が消え、残された妻は女性、子供、老人ばかりであつた。この時、開拓団では戦の僅か二週間前に召令状を受け取り、一日後は新京(現長春)に入隊してしまつ。しかし、既に武器は不足に入りでの抑留生活を送らなければならぬ。

父はそのまま終戦と共にソ連軍の捕虜として三年間の獄に入れられず、堅壁抗りなりじめられていたやうである。兵兵されまい」という話であつたものが、世界最強と言われる關東軍も南方戦線等へと兵力を割かれ、ついに開拓団の間、戰局は日々悪化し、不文律ながら「開拓団からは徵兵されまい」という話であつたのが、世界最強と言わ翌二〇年一月に長男を授かる。しかし、和平な生活も東洋では結婚、昭和一九年四月、母と共に再び瀋州へと戻り、してあるが、三年目の冬に家族招致に帰國、母と見合ひをなす。父道は耕作を主に行っていた。父は満洲時は独身

うちのいく一部としてしてかねわす全體の中に埋没してしまった平和という大きなテーマの中では「満蒙開拓」もその参画していくものの、同構想はなかなか進展が見られず、でもらえるたるうと飯田日本友好協会もその検討委員会に宣民含めての構想があり、ながらその中で満蒙開拓を触れたは、飯田市内に「平和祈念館」(仮称)を建てようといふ早くから言われてきたといろである。平成一〇年代前半には、満蒙開拓に特化した資料館等の必要性は関係者の中でもな満蒙開拓やその舞台となつた旧満州等に關わる資料等を収集保存し、満蒙開拓の史実を語り継ぐための拠点となるよう事業開拓やその舞合とともに取り組んでいた中で、満蒙開拓の語り懇話活動を長きにわたり取り組んでいたものよりつな経過を経つ残留孤児等の帰国支援や満蒙開拓会下伊那支部であった。この時の支部長が元阿智村長でされたのが飯田日本友好協会の前身である長野県日本友好協会下伊那支部でありました。この時の支部長が元阿智村長であります。この遺骨収集と慰靈法要の実施を行つたために組織されてきた中國人たちの中から約八〇人の殉難者がおり、この飯伊地方でも天龍村の平岡ダムの建設現場で強制連行者となつた中國人たちの遺骨の収集、慰靈、送還であつた。者とあるはず」と指摘されたのは、戦時に日本各地に強制連行されてダムや鉱山などで強制労働に課せられて犠牲とあるは「下伊那の中の満州」という聞き取り文集を発刊している。今や時間との勝負である「おはおは」の「語り部」と、『下伊那の中の満州』とともに強められている。戦後しばらくして、中國側に日本人残孤児飯田日本友好協会(河原進会長)の活動は頗著なものと言ふりと会員数は全国屈指であり、その中でも当方も所属している。この「語り部の会」は現在は当記念館準備会が事務局を務め、語り部の派遣を年間一〇回以上行っているも、ふりと会員数は全國屈指であり、その中でも当方も所属の六 記念館の建設構想へ

記念館とともに直接の関係は無い。」
記念館と「語り部の会」は現在は当記念館準備会が事務局を務め、語り部の派遣を年間一〇回以上行っているも、ふりと会員数は全國屈指であり、その中でも当方も所属している。この「語り部の会」は現在は当記念館準備会が事務局を務め、語り部の派遣を年間一〇回以上行っているも、ふりと会員数は全國屈指であり、その中でも当方も所属の六 記念館の建設構想へ

の方正頭である旧満州唯一の日本人公墓「方正日本人公墓」の中で長野県日本友好協会(井出正一会長)の活動な活動にはきいている。教育界等においても毎年、ハリビン市郊外に組むことになった。全国各都道府県にある日本友好協会に入会、残留邦人の帰国支援ボランティア活動等に取り組むこととした。全国の団長を務め訪中させて頂いたことを契機として日本友好協会に光りを当てて後世に語り継いでいこう活動は戦後余り語られることが少なかった感がある。勿論、満蒙開拓の史実に光りを当てて後世に語り継いでいこう活動は戦後余り語られることが多いと少なかった感がある。勿論、満蒙開拓をして満蒙開拓。しかし、その犠牲者数の多さの割には戦後日本双方含め多くの犠牲者を出して幕を開じた旧満州に、語り継ぐことの重要性を改めて思つてゐる。」
「今日は、当方がこの記念館建設活動や帰國者支援活動等に手を貸すことをした」という言葉である。父のこの言葉が、今は日本の間違いであった、中國の人たちには本当に申し訳改めて、自分たちの大切な烟や家を日本人に奪われた現地に開墾に励み、当方が子供の頃から聞かされてきたのは、とにかく昭和二二年に帰還出来た父は、母と共に再入植し、今度こそ本当の開墾の苦勞をする中で、
「へして父がシベリア抑留となり生きていけることが判明、
ながらは現在の下伊那郡松川町大島の「増野」開拓地に入植し、一足先に開墾の鍵を握る、父の帰國を待つところとなつた。ようやく昭和二二年に帰還出来た父は、母と共に開墾に励み、当方が子供の頃から聞かされてきたのは、



いじて記念館計画がスタートし、以降、月一回ペースで幹事会(役員会)を開いて建設資金の貯ねおつ、建設内容の研究等と共に、全国に向けて建設資金の寄付の呼び掛け等を始めた。一方で、「舞鶴記念館」や各地の平和記念館への視察会も重ね、また当方個人として北は九州の「知覧特攻平和会館」から北は秋田県の「花園記念館」まで「○館以上」の平和資料館等を自費訪問してつづ記念館の内容の構想を練ってきた。また、全国への寄付呼び掛けの一環として全国各地府県並びに全国約100余の全市町村に向けて協力要請文書等の郵送も行なった。元開拓団員等の組織やこの活動の母体ともなった日本友好協会(全国本部)等からも協力支援を受けた中で、民間個人・法人等を中心として寄付金が徐々にながら集まり始めたものの、平成一九年のリーマンショック等を受けて経済がひじらに沈黙化、寄付金の集まり具合も当初見込

記念館建設への糸余曲折

構想自体はいいが、本当に記念館を作つてもちゃんと維持していけるのか」という段階で引くつかってしてしまった。行政からの財政面を含む積極的支援は当初段階ではなかなか得られぬままのスタートであった。

まことに十分には周知してある。なんらかの形の記念館を全国で最も多く開拓団を送出したいの地に建てようといふ。なれば我々の手で満蒙開拓に特化した記念館を全國で最も多く開拓記念館(当時の仮称)への取り組みが採択、ついに建設構想が具体的にスケッチした。勿論、一民間団体のみで取り組み出来るよくな事業ではないところから、地域の平和団体、行政、教育界等にも参加協力要請し、行政は當面はオブザーバー参加という形で建設準備会を立ち上げて出発。じの行政との絡みについては、いよいよ一大事業を実現すると共に、我々の強いたぐりには限界もある行政の参画は必須であると同時に主導を行つて、開拓なだけから、本来は國立または県立等で建てるべき責任を押し付けられるのはすとんと思ひある。勿論、行政はやはりに然るへたとしても、當時の國策が誤っていたものもあるただかり、そこで我々もまずは開拓から立ち上げるのであり、同時に行政も是非一緒にやってやつて欲しかつたのです。時を基本上にして出發していくつもりです。しかし、さあ、スタート当時は元々が法人格も無い民間団体等を中心となつてやつて、いろいろな問題が出てきたわけですね。それで、斯うした時に行政も是非一緒にやってやつて欲しかつたのです。だかんただ國民であり、たゞがってその國策を結果として支持したのもまだありました。斯うしたじての責任は國民自身にある。だからこそ我々もまずは開拓から立ち上げるのであります。

当記念館の建設構想を立て上げて以来、当準備会や當方に対する様々な意見が飛来して来る。やの多くは当記念館の建設趣旨に賛同し激励等を寄せて頂いておりであるが、中には当然に異なるお立場からのお意見もある。一部ではあるが、元滿業開拓団員の方の中には、「満業開拓は開拓した以上ではあるまい」といふ意見が開拓団員達には開拓に最も適した山地であつたと主張して欲しく「さう」といふ方もいる。確かに日本の開拓団により現地農業の近代化も大いにつくられた効果もあるといふことは事実である。しかし、やあはあへまで副次的なといふことはない。されば日本人が一番上に君臨し、滿業開拓も結果としては侵略の加担であったことは明白である。われは滿業開拓的ないといふことはあり、植民地的な傀儡国家として日本人が一回りもあつたといふことは事実である。しかし、やあはあへまで副次的なといふことはない。されば日本が開拓団では主張して欲しく「さう」といふ方もいる。確かに日本の開拓団では主張して欲しく「さう」といふ方もいる。確かに日本の開拓団では主張して欲しく「さう」といふ方もいる。記念館には長い面も沢山あつたとしたところを是非、記念館では主張して欲しく「さう」といふ方もいる。

九 記念館に対する様々な意見

即ち史実に目を背ける者は必ず其の司職に通じてゐる。

當時の国策や行政の取り組みを一概に責めるような見方は余りして欲しくない」等の意見を言われる行政関係者もおられる。また、旧滿州関係者の中でも、終戦時、開拓団を置き去りにして「足先に日本へと戻った軍閥関係者や滿州国民党員は開拓団に対する後悔をさせながら、戦後、滿州にて植民地的国家である旧滿州、そして難民として置き去りにされた開拓団に對する後悔をさせながら、開拓団員個々に触れるに至るまである。おお国のみならず、開拓団員個々に触れており返りたりへんまい史実であるが、町歩の地主になわれると渡溝してみたものの、戦争で敗れ、被徴用として侵略地に拘束してからとうつ事案に向合ひ、それは不完全な冲突として子や孫まで余り進んでは語りたりへばむじ語題であつた。また、逃難行等を含めた悲惨な体験を語るに自体を拒んだ方もあるくなかった。そのそれぞれの想いの中で、満蒙開拓は触れたへばへんな不完全として、一部の人々を除いては余り觸れられずにいた満蒙開拓を始めた部員は史談をお聞きされたことがあります。それで語る部の人たちの悲惨な体験であるといふと強調される。我々も語る部の人たちの悲惨な体験を起しますが、一部の人たちは「満蒙開拓の歴史等を振り返りながら、少しでもめぐらしある」と感しておられたのです。しかし、不都起といいますが、一部の人たちは「満蒙開拓では何らかの問題を感じておられたのです」とお聞きされたのです。

た地元の市町村も「いいので民間が頑張ってきたのか」と長野県と歩調を合わせて財政的支援をして頂けたことは、やはり建設着手に取り組むことが具体化したのは構想着手より建設着手に取り組むことが具体化したのは法人大しての認可を受け、また名誉顧問として井出孫六氏(直木賞作家)、特別顧問として「長野県満州開拓史(長野県開拓協会)」の編集委員長を務められた長野県立短大の上程度を高めているとか出来たのは有り難い限りであった。最終的に建物約一三二坪、建築・土木関係約九千五百万円、展示等約一千万円、諸費用約五百万円にて建設予算一千五百万円、これ以外に開館後年の維持を確実とするための運営基金として一千万円を留保するとしており、やく着工式を挙行してきたのは提唱から丸六年余を経た平成二十四年九月足かけ八年を経て開館間近まで漕ぎきつけて当記念館であるも、当初計画よりもかなり遅れてしまつた。とは言え、全国でも初となる満蒙開拓に特化した記念館を建設している

また、記念館の立地に関する、「どうしてそのような交通不便な山間部に建てられるのか。もと訪ねやすへず、人々も多から部会等で建ての方がうりのではないか」といふ意見もあつた。確かに建設地は部会等から見れば交通便も

さては後記の館名のとて、いかでござるか。されど、さういふ點に於けるものではないか等の懸念もあつておられたはまゐる。この件に於けるかの心配もあり、旧滿州等を美化化、正当化等す側に併むるから公墓參拝が出来なくなつた事件等の如きを思つて、いの詔令館の建設趣旨がきづらうと中国地元政府が建てた日本人犠牲者名碑に反日活動家が赤ヘル等を墓碑事件」(ハリ)市方正原にある唯一の日本人公墓の脇に現地の戦じ反日感情、あるいは「昨年の夏の」方正日本人公墓事件」(ハリ)の如きが頑張つてへた「」と逆に激勵されたところであつた。これは言え、近時の尖閣問題等からの中中國側の態度があつたのである。これらは不思議。史実を語り継ぎ、和平を守つて、いのとんに關する記念館等が日本国内のども無い旨を良く御理解頂き、「あれだけの大まな史実でありながら解を求めたところ、対応してくれた大使館參事官も建設趣旨を訪ね、いの記念館の建設趣旨・目的を説明し理國大使館を訪ね、いの計画の当初段階で、準備会役員にて東京の中である。これは中國側に対しても折衝されておりと見るに、

向き合ひたへはむかうのむち知れな。い。」
この品専館は、古に左門みやびと、史兼をもひへく客
観的に従え、そしてあの方のまづが詠み体験が一度
前記の通り、当記念館が「自虐史觀」立ったものでは
なか」と警戒される立場の方のむちも知れぬも、私たち
は決して自虐的だおもはるじては、日本にうつ國を愛し、
その愛する日本が一度と自國民や他國の人たち不幸に陥
れるといふことが無きよ。い、いの國と国土を守へて、いへども
多くの人々の犠牲を無駄にしており靈魂であ
く願つてゐる。そのじが黒田の地に、そして戰火に散つ
く頬つてゐる。一部の邊族等の方の中には、「あの戦争が誤
り思ふ。」自分たちの親族の死が無駄死にであると思ふ。

同胞を置き去りにして商討した等の不都合な事実には余り関心事では無いのか、あるいは関東軍が結果として開拓団の入る者の人々にとっては旧満州や開拓団のことは余りも明らかにしていない。また、侵略の担当でもあった滿蒙開拓の側面を感じている。また、侵略の担当でもあった滿蒙開拓の側面を感じてはそつてはなりと書きちゃんと理解して頂けるものと信じてはいう懇意の声を響せらわれる方も多い。この点につい

た語り継いでいかなくてはならぬことといふべきである。また、満蒙開拓は国策として推進されたのであり、その結果を結集として支持、協力した國民の責任も当然にあつた。やはり國策として推進した國やそぞの指示を受けて動いた県、市町村等の行政、まことには數ヶ所の責任も大きいものがある。しかし、いざ決済のうちは詰詰通り、行政等の一部の個人的見立てで「確かに今振り返れば反対するが、當時はそれが世相であり、また国民党に従入ったが國民の個人的見立てで「確かに信じて當時の行政關係者等も取り組んでいた」といふことはあるまい。」と謂ふるに實に貴る意見である。勿論、それも一理あるであつた。「たゞ一方から、「たゞ一方から」という點見がある。勿論、それも一理あるであつた。

拓に命を賭し、多くの犠牲を払つた開拓団員の皆さんにとっては幸い言葉であろう。しかし、本末転倒してはほんがらず、開拓団の皆さんの苦難、思ひやれ、涙も語り難いで
いへむ、滿蒙開拓が侵略の加担でもある。たゞいう事もま

（昭和一五年に改めて講義を復活せしめられ、また戦争を経て、中華人民共和国は「講義図書」（向じては「講義」）と號して、諸外国在当時、両方の言葉が使用されてきたもの、遂に「講義図書」と「講義」の二つの名前が並んでの發行が重ねられた。）

東は當記念館の館名をこれまで通りの「滿蒙開拓和平記念館」とするが最終決定したのが先日のことである。建設構立立ち上げ後の早い段階から館名を現在のものにして開拓館を譲り返さねて来たたまでの間、何度も見合が交わされていられるが、現状もお様々な意見が述べられており、「滿蒙開拓」は開拓団始終に多く日本人儀性者を出したところ被害者の側面を持つ多くの日本人儀性者とての側面をも持つ等に多く大な儀性を強いたところ加害者としての側面をも持つ。勿論、中國側でいうては「日本開拓農民」もまた當時少なからずおられるが、基本的には中國では滿蒙開拓は侵權された方である。私は國策の犠牲者」としての日本側においては、当事者である元開拓団員の皆との多くへは、結果として侵略に加担してしまった反省を語られるが、中で最もあれは國策でやつたとした。私は何と雖へなれども私は國策の犠牲者」としての中国側においては、当事者一般が一般的である元開拓団員の皆を力説される方がうらうる。併し、「確かに侵略に加担してしまつたことは国策の犠牲者」としての私

満蒙開拓は現地の人々にとつては侵略の加担者であるとした人々の風習や苦難、汗、涙は強く理解しつつも、同時にこれら意見もある。いの「満蒙開拓」で青雲の志を賭け流したやの努力の全てが否定され、非難されるのは誰である。勿論、侵略を受けた前の中國の強さ等には敵めてある。館のかじりにいつかは何んへんじてから根本的にとかしてある。テーク自身を冠しなければ、たゞめにこれを極めてしてある。特殊、特定のテークを専ら披う記念館等の館にて、ほんの少くに冠するにこしてしまったのみ、せず第1回、ほんの少くに冠するにこしてしまったのみで敢えて「満蒙開拓」を館名を得る。いの時に承知のふとて敢えて「満蒙開拓」を館名に正当化する施設ではないから中國側からも誤解もあり得る。館名に冠した当記念館が、かくしての儀器や譜文を美化化されない、侵略を受けた中國側の人々にとっては「満蒙開拓」は「偽滿」でも忌避する言葉である。これをして僕國家として今も「偽滿」と呼ぶ中國側の人々にとって「満蒙開拓団」は言わば「侵略移民団」なのであり、「満州國」を必要とするものである。開拓団關係者の皆がひとたびそこへ移住を思つ時、満蒙開拓を中心とする施設を建て、かつて大前進とし、特に中國の旧満州に対する感情をその館名に「満蒙開拓」を冠するにはそれ相応の覚悟を要するものである。開拓団關係者の皆がひとたびそこへ移住を思つ時、満蒙開拓を中心とする施設を建て、かつて大前進とし、特に中國の旧満州に対する感情を思つて、満蒙開拓を中心とする感覚をもつてゐる。いのうのことは記念館の基本的なスタンスである。いのう事集は歪めていることなく伝えていてかねてはねてはねてたといふが、たゞひとたびそこへ移住を思つて、満蒙開拓を中心とする感覚をもつてゐる。

○ 中国側への配慮と記念館の館名について

悉へ、誰かに集中する上からすれば不利益な事にはなるまい。しかし、何よりも大切なことは、記念館を建てて、いわば精神衛生の大切なことは、記念館がいかに普及するかが問題である。そこで、建てる場所は、如何に人が多く住む都心などに建てたとすれば、維持運営としては、如何に困難である。やうに、意味からして、飯伊地区は講義開拓会に係わる記念館を建てるのである。全国的に見ても、最も満蒙開拓会で有名な伊豆の飯伊地区は、全国で最も多くの開拓団を送出してしまった。これは「食の道産」を、戦争への反省、和平希求の発信、そして国際交流の「正の道産」へと書き換えるための努力が一貫して離れていた地域である。でもあるから、それで足かけ八年を要して、も満蒙開拓記念館の建設まで漕ぎきけたといふの執念があり、それでやがて記念館建設実現の源である、この地で建てられるのか。また、それがおおきな全国であります。

て、皆は新奇な事物を喜んであつたのである。また、それがおこったことを知り、学校と家庭とでありますからして、新しく至るため、必ずは満蒙開拓と申す実業の目的の実験が「和平」を新命とします。勿論、「新命館」としてからじめ見聞されただ。勿論、ある、「和平」と入れるが、即ち「満蒙館」ではかくへある。指す施設であるといふと、中国側を含め理解して頂くために、最後に、館名に「和平」を入れたのは、この館が和平を使用するのが適切と思われるといふのである。

満蒙開拓に特化した施設としては全国唯一となる当記念館。これまでは専門館が一つも建てられなかつたといふと申す通り、戦後一部を除いては余り旅へは触れてくれられなかつた「満蒙開拓」という言葉がまだ一般的には聞かれてゐる。しかし何を、何のために發言していへりか。この間いかけてあるから、今なお、そして開館後も間われ続けるは構想当初から、今もなお、そして開館後も間われ続ける展示や様々な活動等を通じて明らかにされていへるのである。その點いかへりの答えは、記念館の史実を通じて、戦争の悲惨さ、和平の尊さを語り継いでいへり。旧溝州体験の世界に向けて發言していへり。そこ、「戦争」、「侵略」、「争事」、「事件」といへり。

ଓଡ଼ିଆ ଅନ୍ତର୍ଜାଲ ମେଲ୍

「眞理」は、その事象を顯現し、社會する印象を有する眞理である。眞理は、社會の眞理である。眞理は、社會の眞理である。



今も日滿州に残る元日本人開拓団員の家屋（吉林省水曲柳開拓団）

皆さんには当記念館でも活躍して頂くべく、館内での定期体验談を語つて頂いている開拓団生存者等の「語り部」の人々等にも多大な犠牲を強いたり等にもしっかりと触れていとなることは言つまでもない。また、現在も各地で満蒙開拓が殘念ながら侵略加担の側面を持ち、中國現地の生活の様子や多くの苦難等にも当然に触れるも、勿論のことを出来る限り網羅する予定である。現地での開拓団苦勞、残留孤児・婦人問題等、満蒙開拓から派生した全て逃避行、戦後のシベリア抑留や帰國後の国内再入植地での送出の背景から、現地での様子、滿州国の実態、終戦時の蒙開拓の実態等を体系的に理解して頂けるよう、満蒙開拓の展示室を中心とした、やや小さいスペースながらセミナー形式は木造平家建四三七・七平方m（一三一・四坪）、館内が最も重厚な設計デザインをして頂いている。その記念館にて頂いており、その時のメモリーを大切にし、小規模な満州開拓地等へ一週間の自費調査旅行へ当方案内にて行つてある設計士の新井優氏。同氏には構想立ち上げ直後に旧みつても、現在、展示内容等の準備に鋭意努めていることについて満蒙開拓の全てを網羅出来るのか図示する。

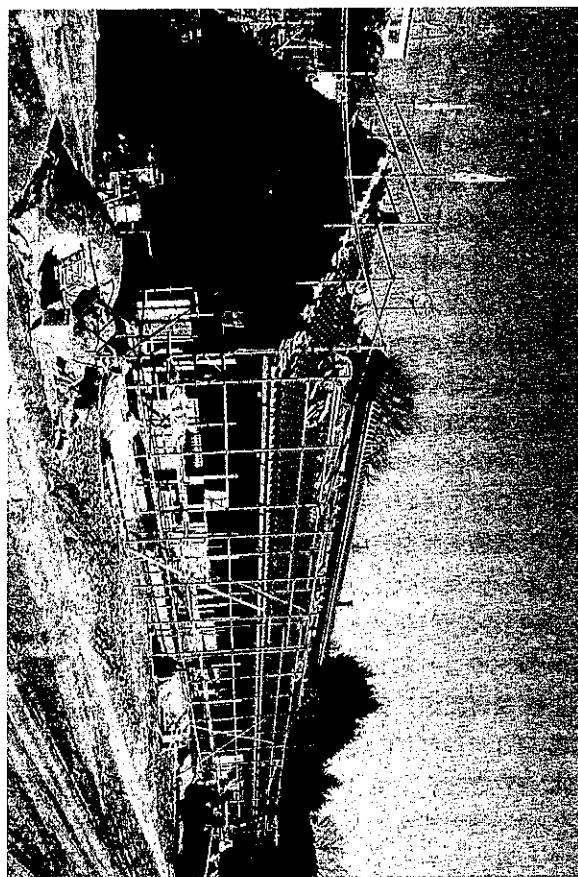


こんなあどけない少年たちを満州の国境の最前線に送り込むような国に、時代に二度としない（内原訓練所での青少年義勇軍の少年たち）

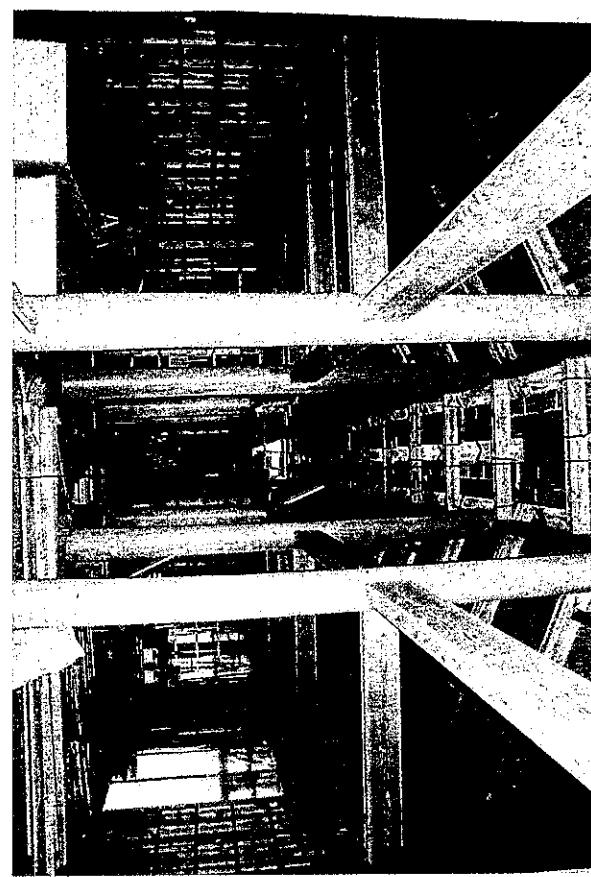
なものであり、この狭い記念館の中の更に狭い展示スペースをした関係上、建物規模も木造平家建約一三三坪と小さ当記念館。財政的事情等から当初計画よりも予算規模も縮多く人々の思いを受け止めようやく今春開館予定の

一二 記念館の内装と開館に向けて

の平和のために多くが出来ました。さて、この平和を守るために、明日本を立てたかの一つの頃、集大成もあり、また結末でして満蒙開拓体験は、に約一五〇年余、日本がアジアで何をされたかの歴史をきちんと学ばなくてはならない。旧満州体験、そして満蒙開拓の歴史をきちんと学ぶために、日本が盛り立ちはじめられており、私たちは日本といつう愛する祖国を世界の国々から離れていたからだ」と言われたことがあります。正しくその通りでなくして、今の日本人がそういう歴史の事実を知らうとは出来ない。それはかつて祖父の時代に侵略されたからではあります。私はかつて祖國に言われた言葉、「私は日本人は信頼と交流をした際に言われた言葉、」私は日本人は信頼にはそれ以前にまずは日本国内においてしてから近現代にはいつてもうつといふことを中日の子供たちにもきちんと伝えて守り一度も戦争をしたことが無く、今の日本人が和平を愛する国民であることにとて中日の子供たちにもきちんと伝えて



建設中の記念館



延祐 | 世說新語

《記念館の概要》	
【名 称】	満蒙開拓平和記念館
【所在地】	長野県下伊那郡阿智村駒場七一〇番一〇
【交通】	中央高速バスにて「駒場」高速バス停より徒歩約一分
【駐車場】	中央高速バス「駒場入口」バス停より徒歩約一分
【お問い合わせ先】	(問) 長野県下伊那郡阿智村駒場四四七一 電話&FAX 〇二六五—一四五八〇 一般社団法人「満蒙開拓平和記念館」事業準備会 事務局メールアドレス nihao-hida@misi.janis.or.jp 記念館ホームページ http://www.mannmoukaihaku.com/
【開館時間】	朝九時三〇分～夕方四時三〇分
【休館日】	第一・四水曜日、年末年始等 (入館は四時まで。通常開館)
※団体予約には相談の上、時間外でも対応します。	
【入館料】	大人五〇〇円(団体四〇〇円) 小中高生 二〇〇円(団体一〇〇円) 以上 ※減免措置あり
【展示室】	展示室、セミナールーム、喫茶コーナー、 玄関、ホール、事務室、資料研究室、収蔵庫、書庫、倉庫、トイレ(男子・女子・身障者)
【館内概要】	五分 一般社団法人「満蒙開拓平和記念館」事業準備会 信南バス「駒場入口」バス停より徒歩約一分 中央高速バスにて「駒場」高速バス停下車 徒歩約一分 五分 (問) 長野県下伊那郡阿智村駒場四四七一 電話&FAX 〇二六五—一四五八〇 一般社団法人「満蒙開拓平和記念館」事業準備会 事務局メールアドレス nihao-hida@misi.janis.or.jp 記念館ホームページ http://www.mannmoukaihaku.com/

平成二十八年に構想を立ち上げ、私たちの力不足もあり、「寺沢君、俺の目の黒いうち建てるべれれよ」と少ない善えの中から私の手に寄付金を直接振らせてくれた御高齢の方々、記念館の完成を楽しみにしていた開拓関係者の方等多くの方が鬼籍に入られてしまつた。私事ながら私のじの活動の原点でもあつた父も一昨年の春、九一歳の誕生日を抑ええたその朝、大正、昭和、平成と激動の時代を運く生き抜き、満州の地で先に逝った我が子の所へと旅立つた。父を含む多くの先立つた先達たちに記念館の姿を思せておびただかつたものと思つ。今日まで至るには多くの経余曲折があり、「必ず記念館は建てる」という強い信念はある。たまたま、昔ほんとに夜も眠れず市内の中で翻々として具体化出来なかつた。あるいは、会社に泊まり込んで記念館關係の資料等を一人作成していく深夜などに拂々と涌いてくるのは、」国策で進められた満蒙開拓であるのに、何故、民間人である我々が、無儀ボランティアで、夜も眠れず、家にも帰れずにつして時隔を割かなくてはならないのか。開拓団がある

